著作権保護コンテンツ

この人にあれもこれも

こんにちは！絵本作家さん 大特集

ザ・キャビンカンパニー

2014年に絵本『だいおういかのいかたろう』でデビュー。大分県の廃校をアトリエにし、絵本作家として、また、美術家としても創作活動を行っているのが、阿部健太朗さん×吉岡紗希さんのユニット、ザ・キャビンカンパニーです。24年に大規模な展覧会「ザ・キャビンカンパニー大絵本美術展『童堂賛歌』」をスタートさせるお二人に、作品づくりやアートへの思いをお聞きしました。

取材・文／小山まゆみ　撮影／橋本 大

著作権保護コンテンツ

挑戦者たち

『ジョナスのかさ』
文／ジョシュ・クルート
絵／アイリーン・ライアン・イーウェン
訳／千葉茂樹
1,650円（光村教育図書）

ロンドンは雨の多い町でしたが、傘はみっともないものとして、誰もさしませんでした。ジョナス・ハンウェイがはじめて傘をさして歩いたとき、人々は奇妙きてれつ、前代未聞のびっくりぎょうてんとばかりに驚き、笑いました。

『ナイアガラの女王』
絵・文／C.V.オールズバーグ
訳／江國香織
品切れ中（河出書房新社）

未亡人のアニー・テイラーは、老後に職もお金もなく途方に暮れていました。何か、一瞬にして富と名声を得られる方法はないものかと考え、樽に入って、ナイアガラの滝を下ることを思いつきました。

『炎をきりさく風になって
ボストンマラソンを
はじめて走った女性ランナー』
作／フランシス・ボレッティ、
クリスティーナ・イー
絵／スザンナ・チャップマン
訳／渋谷弘子　1,980円（汐文社）

子どものころから走ることが大好きだったボビー・ギブは、いつかボストンマラソンに出場したいと思っていました。でも、女性に長距離走は無理という理由だけで断られてしまいました。

『100歳ランナーの物語
夢をあきらめなかった
ファウジャ』
文／シムラン・ジート・シング
絵／バルジンダー・カウル
監修／金 哲彦
訳／おおつかのりこ
1,760円（西村書店）

幼いころは体が弱く、歩けないのではと心配されたファウジャ・シン。そんなファウジャがマラソンを始めたのは80歳を過ぎてからでした。100歳のときにはカナダの大会で完走し、最高齢の記録を立てました。ファウジャは113歳になったいまも元気です。

こんな実話も！

『たべてみて！
フリーダ・キャプランが
ひろげた食のせかい』
文／マーラ・ロックリフ　絵／ジゼル・ボター
訳／福本由紀子　1,980円（BL出版）

フリーダは、アメリカではじめて野菜や果物の卸業を営んだ女性です。フリーダがロサンゼルスの市場で働きはじめたころは、わずか65種類だった青果が今では700種類以上あると言われていて、そのほとんどはフリーダが紹介したものです。

『ビーナスとセリーナ
テニスを変えた
伝説の姉妹』
文／リサ・ランサム
絵／ジェイムズ・ランサム
日本語版監修／飯田 藍
訳／松浦直美
1,760円（西村書店）

姉のビーナス・ウィリアムズがテニスを始めたとき、妹のセリーナもついてきました。毎朝暗いうちから市営のテニスコートを掃除して、明るくなるとすぐに練習を始めます。テニスの歴史を変えたといわれる姉妹です。

『子どもの本の世界を変えた
ニューベリーの物語』
文／ミシェル・マーケル　絵／ナンシー・カーペンター
訳／金原瑞人　1,980円（西村書店）

18世紀のイギリスでは、子どもの本は数字やアルファベットを覚える教材でした。はじめて子どものためにおもしろい本をつくったジョン・ニューベリーは、子どもの本の父と呼ばれています。

『その絵ときたら！
新しい絵本の時代をつくったコールデコット』
文／ミシェル・マーケル　絵／バーバラ・マクリントック
訳／福本友美子　2,640円（ほるぷ出版）

1850年代の子どもの本は、粗末な絵のついた安価なものでした。でも、ランドルフ・コールデコットが描く絵は、人も動物も、みんな生き生きとして楽しいもので、子どもたちはたちまち夢中になりました。

『図書館に児童室ができた日
アン・キャロル・ムーアの
ものがたり』
文／ジャン・ピンボロー
絵／デビー・アトウェル　訳／張替惠子
1,760円（徳間書店）

アン・キャロル・ムーアは小さなころから自分の考えをしっかり持っていました。まだ女性が仕事を持つことが珍しかった時代に、図書館学を学び、ニューヨークの公共図書館で子どもの本に関わる仕事につきました。

『子どもの本で平和をつくる
イエラ・レップマンの
目ざしたこと』
作／キャシー・スティンソン
絵／マリー・ラフランス　訳／さくまゆみこ
1,760円（小学館）

イエラ・レップマンは、子どものすこやかな成長には良質な本が必要と考えていました。国同士が政治や宗教の枠を越えて手を取り合う、国際児童図書評議会（IBBY）の創設に尽力しました。

本を手渡す

『トマス・ジェファソン 本を愛し、集めた人』
文／バーブ・ローゼンストック　絵／ジョン・オブライエン
訳／渋谷弘子　1,540円（さ・え・ら書房）

本好きのトマス・ジェファソンは50年の間に本を集めに集め、図書室をつくらなければならなくなりました。しかも分類しながら読み進めたため、そっくりそのままアメリカ議会図書館におさまるほどでした。

『「走る図書館」が生まれた日
ミス・ティットコムとアメリカで
最初の移動図書館車』
作／シャーリー・グレン　訳／渋谷弘子　2,640円（評論社）

女性が高等教育を受けることが珍しかった1800年代に、メアリー・ティットコムは強い希望で、女学院で学ぶことができました。その後、司書という一生の仕事に巡り合います。

プチ特集

子どもと一緒に 平和を考える本

「この本 読んで！」では、毎年夏号で平和を考える時間をみなさんと共有したいと思っています。
ここでは、昨年の夏(87)号以降に発売された、戦争と平和を描いた作品のほか、多くの子どもたちの命が失われ続けているパレスチナについても思いを馳せることができるような過去の作品もご紹介します。

過去の戦禍から

『赤いボタン』『火のトンネル』
写真・文／岡本 央　各1,760円(大月書店)
1945年8月9日、長崎市に原子爆弾が落とされました。爆心地近くの小学校では、その恐ろしさを子どもたちに伝える取り組みが続けられています。展示された被ばく品や、被ばく者の話などから感じとったことを、大きな絵に描きます。

『トットちゃんの15つぶのだいず』
原案／黒柳徹子　文／柏葉幸子
絵／松本春野　1,760円(講談社)
戦争が始まってからしばらくして、トットちゃんは1日分の食料として、お母さんから大豆15粒を手渡されました。朝、登校中に3粒、学校の防空壕で3粒、まだまだおなかは減っています。2023年に刊行された黒柳徹子さんの『続　窓ぎわのトットちゃん』(講談社)にもあるエピソード。

読みもの
『かげふみ』
作／朽木 祥　絵／網中いづる
1,760円(光村図書出版)
夏休み、祖母の家に泊まりに来た小5の拓海は、図書館で少し古風な少女を見かけました。あるものを探しているようなのですが、なかなか話しかけることができません。表題作のほか、教科書に載っている「たずねびと」も収録。

読みもの
『ワタシゴト 14歳のひろしま・3 いつものところで』
作／中澤晶子　絵／ささめやゆき
1,760円(汐文社)
修学旅行で広島に行くことになった中学2年生の明(めい)やタカシたち5人は、事前学習で被ばく者の北川さんの話を聞きます。それぞれ得意な絵や編み物などを通して、広島について考え、形に表そうとします。

読みもの
『アンナの戦争 キンダートランスポートの少女の物語』
作／ヘレン・ピーターズ　訳／尾崎愛子
1,870円(偕成社)
ドイツで暮らしていたアンナは、ナチスの迫害から逃れ、両親と離れてイギリスへ旅立ちます。無事イギリスの田舎で里親一家にあたたかく受け入れてもらうのですが、ある日、その家の納屋に、ドイツ兵のスパイが潜んでいました。

読みもの
『川滝少年のスケッチブック』
作／小手鞠るい　絵／川瀧喜正
1,540円(講談社)
おじいちゃんが描いたというスケッチブックがおもしろくて、僕はもっと話を聞かせてもらうことにしました。スケッチではユーモラスに描かれていますが、戦禍の過酷な日常が伝わってきます。作者の父が子どものころに描いたスケッチをもとにつくられました。

著作権保護コンテンツ

パレスチナを知ろう

サイン本プレゼント Webまたはアンケート用紙へ

読みもの
『瓶に入れた手紙』
作／ヴァレリー・ゼナッティ
訳／伏見 操
1,650円(文研出版)
イスラエルのエルサレムで生まれ育った少女タルは、手紙を入れた瓶を海に流してもらうよう兵役中の兄に託します。ある日、瓶を拾った人からメールが届きますが、思っていたような相手ではありませんでした。

読みもの
『カイト パレスチナの風に希望をのせて』
作／マイケル・モーパーゴ　絵／ローラ・カーリン
訳／杉田七重　品切れ中(あかね書房)
イギリス人の記者がパレスチナの丘で出会った少年サイードは、言葉を発することなくカイトをつくっていました。サイードは兄を銃撃で失ってからずっと、カイトをつくり、揚げ続けていたのです。

『パレスチナに生きるふたり ママとマハ』
文・写真／高橋美香
1,980円
(かもがわ出版)
イスラエルのパレスチナ自治区の村に住むママと、難民キャンプに住むマハ。日本から訪れた著者がつないだふたりは、つらい状況のなか会うことは叶わずとも、お互い励まし合います。

今も続く戦災

『シッカとマルガレータ 戦争の国からきたきょうだい』
作／ウルフ・スタルク　絵／スティーナ・ヴィルセン
訳／きただいえりこ　1,870円(子どもの未来社)
戦争が始まり、シッカは親と離れて遠い国へ行くことになりました。受け入れ先の家の同じ年ごろの子と仲よくするよう言われますが、言葉もわからず、ふたりは反発し合います。

新刊
『きみは、ぼうけんか』
文／シャフルザード・シャフルジェルディー
絵／ガザル・ファトッラヒー
訳／愛甲恵子　1,540円(ブロンズ新社)
家の中がめちゃくちゃになってしまって、どうしたらいいかわからなかったとき、お兄ちゃんが言いました。「冒険家になりたくない？」。お兄ちゃんと私はリュックを背負って、たったふたりで出発します。

『いえ あるひ せんそうが はじまった』
作／カテリナ・ティホゾーラ
絵／オレクサンドル・ブローダン
訳／すぎもとえみ
1,870円(汐文社)
パパとママとイヌのテレシクと一緒に住んでいたすてきな家は、戦争で破壊され、別の家を探しに行くことになりました。あの家は、ずっと心の中にあるとパパが教えてくれました。ウクライナの作家が、ロシアの侵攻で苦しむ子どもたちのためにつくった作品です。

読みもの
『僕たちは星屑でできている』
作／マンジート・マン　訳／長友恵子　2,420円(岩波書店)
アフリカの小さな国で独裁政権のもと、17歳になる少年サミーは徴兵から逃げることを決意します。一方、イギリスに住んでいる高校生のナタリーは、がんで亡くなった母の遺志を継ぎ、難民支援の寄付を募るため、得意な水泳でドーバー海峡横断泳に挑戦します。

新刊

『ぼくの とっても ふつうの おうち 「ふつう」の くらしを うばわれた なんみんのはなし』
作／コンスタンチン・ザテューポ
訳／藤原潤子
1,980円(かけはし出版)
ぼくたちは長い長い旅をしています。車に乗って、電車に乗って、船に乗って、ゆっくり休むこともできません。小さいお庭のある赤い小さなぼくのおうちを、魔法で小さくして、持っていけたらいいのに。

参考図書

『戦争と平和 子どもと読みたい絵本ガイド』
著／草谷桂子　1,650円(子どもの未来社)
2022年のロシアによるウクライナ侵攻を機に、戦争と平和について子どもたちと考えたいとつくられた絵本ガイド。戦争や平和を直接語る作品だけでなく、いのちや友だちについて描かれた本なども紹介しています。

著作権保護コンテンツ

東日本大震災や過去の災害に学ぶ

『はなちゃんの
はやあるき はやあるき』
作／宇部京子
絵／菅野博子
1,650円（岩崎書店）
避難訓練でのんびりしていたはなちゃんは、早歩きしないと津波にさらわれてしまうよと先生に言われ、毎日練習することにしました。ある日、大きな地震が起きて、本当に津波から逃げなければならなくなります。

『はしれ さんてつ、
きぼうをのせて』
文／国松俊英
絵／間瀬なおかた
1,430円（WAVE出版）
岩手県の太平洋岸を走る三陸鉄道北リアス線は、東日本大震災で一部の駅が壊れてしまったり、瓦礫で線路がふさがれてしまったりしました。でも、5日後には、短い区間ではあるものの、運転が再開されたのです。

写真絵本

『フクシマ
2011年3月11日から
変わったくらし』
写真・文／内堀タケシ
1,980円（国土社）
東日本大震災は、地震と津波の被害だけでなく、原発事故による放射能汚染ものこしました。子どもたちは線量計を首から下げて登下校したり、甲状腺健診を受けたりしています。あの日から、暮らしが変わってしまったのです。

『ハナミズキのみち』
文／淺沼ミキ子
絵／黒井 健
1,430円（金の星社）
津波で子どもの命を奪われてしまった私が悲しみに暮れていたら、子どもの声が聞こえました。また津波が来たときに、みんなが無事に避難できるよう、道に道しるべとなるハナミズキを植えてほしいというのです。

『ぼんやきゅう』
文／指田 和
絵／長谷川義史
1,430円（ポプラ社）
東日本大震災の前年まで行われていた盆野球が、震災後7年たった夏、復活することになりました。津波に流されてしまったと思われていた優勝旗が見つかったのです。みんな、試合に向けて準備を始めます。

『ふくしまからきた子
そつぎょう』
作／松本 猛、松本春野
絵／松本春野
1,430円（岩崎書店）
久々にお父さんとおじいちゃんたちが暮らす家に来たまやは、近くの小学校の卒業式をのぞきに行きました。原発事故で避難するまで、この小学校に通っていたまやを、卒業生たちが見つけました。

新潟県中越地震

『震度7
新潟県中越地震を忘れない』
作／松岡達英
1,320円（ポプラ社）
2004年10月23日、午後5時56分に起きた震度7の新潟県中越地震で、川口町にあった作者のアトリエは「大規模半壊」となりました。地元の人たちの声も拾いながら、被災時の暮らしを記録しています。

熊本地震

『2016年4月
熊本地震の現場から
あのとき、
そこにきみがいた。』
作／やじまますみ
1,540円（ポプラ社）
震度7の本震のあと、幾度となく余震が続くなか、小学校にたくさんの人が避難してきました。そこにボランティアにやってきて、明るく手伝いをする黄色いビブを着た中学生たちの姿は、希望となりました。

『うに
とげとげ いきもの
きたむらさきうにの ひみつ』
文／吾妻行雄、青木優和
絵／畑中富美子
1,980円（仮説社）
宮城県南三陸のおじいちゃんの家に遊びに行ったぼくは、大きな地震のあとに起きた津波が陸のものだけでなく、海の中の生きものたちも流してしまったことを聞きました。それでもウニは、海藻を食べつくすまでに復活したのです。

写真絵本

『大津波のあとの生きものたち』
写真・文／永幡嘉之
1,540円（少年写真新聞社）
大津波が何もかもを流し、堤防が壊れて砂浜が広くなりました。震災後2年目には、花が咲き、小さな生きものたちも少しずつ姿を現したのですが、再び堤防がつくられ、生きものたちの姿が消えてしまいました。

写真絵本

『ただいま、おかえり。
3.11からのあのこたち』
写真・文／石井麻木
1,980円（世界文化社）
作者は、東日本大震災後、毎月11日の月命日に被災地を訪れ、被災した人たちの話を聞き、写真を撮り続けています。あの日、赤ちゃんだった子は中学生になり、中学生だった子は成人し、時は流れていくのです。

『希望の牧場』
作／森 絵都
絵／吉田尚令
1,650円（岩崎書店）
東日本を襲った大きな地震のあとに起きた原発事故によって、人が住めなくなった土地に、ウシなどの生きものたちが残されてしまいました。ウシ飼いは、放射能を浴びてしまったウシたちを生かすために世話を続けます。

『かぜのでんわ』
作／いもとようこ
1,540円（金の星社）
山の上にある1台の電話は線がつながっていません。でも、タヌキの坊やがやってきて、受話器をとり、話し始めました。お兄ちゃんに「はやくかえってきて！」と、一生懸命に語りかけます。

著作権保護コンテンツ

今号の注目

『そのとき門はひらかれた 法然上人ものがたり』

監修・解説／
法然上人ものがたり絵本製作委員会
絵／中川 学
2,200円（アリス館）

2024年は、法然上人が浄土宗を開いて、850年目になるそうです。法然上人の生い立ちから、浄土宗を開くまでの様子を知ることは、自身と他者、そして両者の関係を考えるきっかけになるでしょう。

作者の中川 学さんより

法然さんという仏教の改革者が日本にいたこと、そして法然さんが開いた南無阿弥陀仏の教えのことを、どうしたら今を生きる人たちに伝えることができるのかと考えました。お坊さんチームと編集チームで何度も話し合い、なんとか形になりました。僕は法然さんがイキイキと悩んでいる、まだ若いころの姿を描きたいと思い、生まれたところや修行したところに足を運び、そこで感じたことを絵に入れています。法然さんに触れる入り口になれたらうれしいです。

もう読んだ？

新刊100!!

2023年12月～24年2月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順　※㊨は右開きの本。
マークは乳幼児から、は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『うちのピーマン』

文／川之上英子、川之上 健
絵／柴田ケイコ
1,650円（アリス館）

料理されるのがいやなピーマンは、野菜炒めにピーマンを入れたいお母さんと丁々発止の会話を繰り広げます。ピーマンは、ヒーローやお笑い芸人、パプリカのふりをして、食べられないように必死です。

『ひとつぶのおくりもの』

文／マーシー・キャンベル
絵／フレンチ・サンナ
訳／なかがわちひろ
1,980円（あかつき教育図書）

大好きなおばあちゃんからもらったひと粒のどんぐりを、ツリーハウスを夢見て男の子が植えました。どんぐりは時を超え、世代を超えて、大きな木へと成長。それを受け継ぐ人々の心を豊かにし、大きな幸せをもたらします。

『ポッポーきかんしゃ はなさんぽ』

作／とよたかずひこ
1,045円（アリス館）

だるまちゃんが運転するポッポーきかんしゃ、車掌はこけしちゃんです。「しゅっ　しゅっ　しゅっ　しゅっ」と走れば「のせてくださーい」と動物たちが乗り込みます。進んだその先には、美しいサクラの花が待っていました。

『わたしを描く』

作／曹 文軒
絵／スージー・リー
訳／申 明浩、広松由希子
1,980円（あかね書房）

絵を描くことが大好きなウロが、はじめて自画像を描くために選んだのは、自分の名前と同じ「雨露麻」でできたキャンバスでした。やっと描きあげた自画像でしたが、夜が明けるとドロドロになっていました。

『すごいぜ ほんの ちからって！ モーリスの おうちは ライブラリー』

文／ディディエ・レヴィ
絵／ロレンツォ・サンジョ
訳／はしづめちよこ
1,870円（イマジネイション・プラス）

ネコのモーリスは本を読んでネズミを集めて、食べようとしますが、一緒に本を楽しんでいるうちに気持ちが変わりました。ネズミからプレゼントをもらい、知らなかった世界が広がります。

『ゾウのはなのあなは、どこまでつづいているの？』

絵／中山信一
文／高岡昌江
1,760円（あすなろ書房）

ゾウの鼻と人の鼻。見た目は違っていても「つくり」は同じです。でも、ゾウの鼻は物を持つことができて手のようにも働きます。そして、ゾウ同士は、鼻をからめて感情を伝えあいます。

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

今号の注目

『おかあさん観察図鑑』

作／クォン・ジョンミン
訳／わたなべなおこ
1,760円（NHK出版）

おかあさんをはじめて見たとき、おなかの中で想像していたのとは違っていました。体の構造、食や睡眠、活動など、赤ちゃんがじっくり観察したおかあさんの生態がユーモアたっぷりの図鑑になりました。

作者のクォン・ジョンミンさんより

新生児については多くの研究書が出ていますが、「新生おかあさん」についてはだれも説明してくれません。赤ちゃんのそばで毎日24時間勤務をしているのに、だれからも注目されず、関心を向けられることのない母親という存在。そんな姿をありのまま見せたいと思い、この絵本をつくりました。いつも笑顔で完璧な母親像は世間からの要求にすぎません。おかあさんも、赤ちゃんの前であわてふためき、たまには泣いてしまうこともある、ひとりの人間です。

『はなまるうんこ と こまったうんこ』

作／ショーン・ハリス
訳／聞かせ屋。けいたろう
1,870円（イマジネイション・プラス）

「うんこ ここっこ うんこっこ」とリズムよく、こんなところに誰のうんこ？赤ちゃんもパパも困ったうんこはしていません。でも困ったうんこも、ちゃんと決まった場所でできたら「はなまるうんこ」です。

『おんせん ぽかぽか』

作・絵／パト・メナ
訳／星野由美
1,540円（岩崎書店）

太陽がのぼったころ、雪山で暮らすサルたちが温泉にやってきました。ぽかぽかしていい気持ち。おなかがすいたら木の実がごはんです。食べ終わったらまた温泉でぽかぽか。オノマトペと絵文字で描く、サルたちの一日です。

『こどもべやのよる』

文・絵／出久根 育
1,320円（岩波書店）

夜がきて、子ども部屋で起きているのはいっちゃんだけです。あたりはまっくらで、大好きなお月さまを見ることもできません。お父さんが持ち帰った天使の人形は、いっちゃんの手を握ると窓から飛びだしました。

『ともだちの かたち』

文・絵／ダニエラ・ソーサ
訳／木坂 涼
1,815円（岩崎書店）

自分には友だちがいないと思う子。この子も、あの子も、まわりを見まわしてみたらいつの間にか友だちになっている子がいるかもしれません。自分にも友だちがいるとわかる、いろいろな「友だちのかたち」があります。

『わたしのすみか』

文・絵／イザベル・シムレール
訳／石津ちひろ
2,200円（岩波書店）

地球上のさまざまな生きものは、居心地のいいすみかをつくっています。泡のかくれがをつくるカエル、くちばしで縫った葉っぱで家をつくるオナガサイホクチョウなど、27のすみかはどれも工夫をこらした自慢の宮殿です。

『ネコになりたかった クモのルイージ』

作／ミシェル・ヌードセン
絵／ケビン・ホークス　訳／福本友美子
1,870円（岩崎書店）

クモのルイージが住みついた家のおばさんは、ルイージをネコと間違えたのか、やさしくしてくれます。遊んだり映画を見たりと親しくなるにつれ、ルイージは本物のネコになりたいと願うようになりました。

『DJ YOYO アゲイン』

文／おおなり修司
絵／飯野和好
1,540円（絵本館）

ぼくが勉強していると決まって現れるDJ YOYO。遊ぼうYOと誘惑してくるけれど、今日のぼくはいつものぼくじゃない。それでもしつこくDJ YOYOは、あの手この手でぼくを勉強から引き離そうとしてきます。

『ぼくはダンサー』

作・絵／イシズマサシ
1,650円（岩崎書店）

今日はバレエの発表会。音をはずしたらどうしよう、高くとべなかったらどうしよう……。不安なぼくの前に突然現れたきみは誰？　「ふりかえってごらん」という彼の声に促され、ぼくは「とびたいきもち」を取り戻しました。

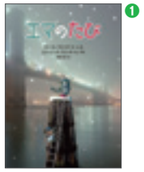
著作権保護コンテンツ

プログラム（各10～15分）小学校高学年

7月 テーマ：たびに出よう！

❶『エマのたび』
文・絵／クレール・フロッサール
写真／エティエンヌ・フロッサール
訳／木坂 涼
品切れ中（福音館書店）

スズメのエマが異国をめざすおはなし。写真とイラストが一緒になっているページは、エマを指で示してもいいでしょう。続編『パリのエマ』があることもつけ加えて。



❷『ちいさな鳥の地球たび』
写真・文／藤原幸一
品切れ中（岩崎書店）

渡り鳥のキョクアジサシが北極から南極までを旅する一年をたどります。厳しくなりつつある生きものの環境にも思いをはせましょう。

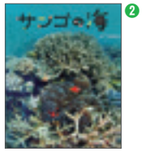
8月 テーマ：夏がやってきた

❶『夏』
作／あべ弘士
1,760円（ほるぷ出版）

ある夏に体験した不思議なできごと。地図の場面はゆっくりと開きましょう。陰影がはっきりしていて遠目がききます。

❷『サンゴの海』
写真・文／長島敏春
1,650円（偕成社）

日本最大のサンゴの海がある石垣島。地上では見ることのできないサンゴ礁の美しい写真が、大きいスケールで迫ってきます。



❸『海ガラスの夏』
文／ミシェル・ハウツ　絵／バグラム・イバトゥーリン
訳／島 式子、島 玲子　1,760円（BL出版）

波や砂にもまれて丸くなったガラスは、いつの時代も子どもたちの宝物。夏の海辺で繰り返される物語が、あたたかく心に残ります。

9月 テーマ：あかりが消えても……

❶『くらくて あかるい よる』
作／ジョン・ロッコ　訳／千葉茂樹
品切れ中（光村教育図書）

急な停電があっても、こんなふうに過ごせば大丈夫。いざというときの心構えや防災についても考えたくなる1冊です。

❷『あらしとわたし しぜんのなかでいきる』
文／ジェイン・ヨーレン、ハイジ E.Y.ステンプル
絵／クリスチャン・ハウデッシュル、ケビン・ハウデッシュル
訳／まつかわまゆみ　1,815円（評論社）

人間も自然のひとつであり、自然の脅威に対峙する力を持っているのだと、はっとさせられます。巻末の気象に関する解説を添えて。

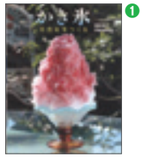
（古市未央）

プログラム（各10～15分）小学校中学年

7月 テーマ：ひんやりおいしいかき氷

❶『かき氷 天然氷をつくる』
写真／細島雅代
文／伊地知英信
1,760円（岩崎書店）

天然の氷は、20日もの時間と手間をかけてゆっくりと凍らせます。暑い夏の始まりに、ひんやりしたおいしい空気を、教室全体で味わいましょう。



❷『カメレオンのかきごおりや』
作／谷口智則
1,650円（アリス館）

カメレオンがつくったかき氷を食べると、心が軽やかになるようです。食べる前とあとで、少し声のトーンを変えて読んでみてはどうですか。

8月 テーマ：楽しいオバケの時間

❶『ようかいサッカー』
文／聞かせ屋。けいたろう
絵／ひろかわさえこ
1,815円（ポプラ社）

妖怪のサッカーを楽しむ気持ちがあふれています。太字の部分は、ぜひ強調して、試合のムードを盛り上げましょう。

❷『お化けの猛暑日』
作／川端 誠
1,540円（BL出版）

オバケも夏は暑いんですね。落語の語り口を少しマネて読んでみるのもいいでね。絵本との距離が、ぐっと近づきますよ。

9月 テーマ：言葉で、遊ぼう！

❶『かぜがつよいひ』
作／昼田弥子
絵／シゲリカツヒコ
1,540円（くもん出版）

みんなで、しりとりを楽しみましょう。次にどんな言葉が出てくるか、少し考える時間もとって一緒に読みあいしてみては？

❷『これは のみの びこ』
作／谷川俊太郎
絵／和田 誠
1,980円（サンリード）

人物が増えると、文も1行増える絵本。1ページひと息で読むのがおすすめですが、群読やリレー読みも楽しめます。場づくりに、ぜひ。

（増田穂里）

プログラム（各10～15分）小学校低学年

7月 テーマ：涼しくなる方法教えます

❶『あつい!!』
作・絵／木曾秀夫　品切れ中（フレーベル館）

こりや誰だ？ 繰り返す問いかけに子どもたちは何と答えるでしょうか。やりとりを楽しむ仕掛け絵本です。

❷『ばばばあちゃんの アイス・パーティ』
作／さとうわきこ　協力／佐々木志乃
1,100円（福音館書店）

これなら楽しんで暑さを解消できるかも……。ばばばあちゃんの解消法がまた最高ですね。

❸『お化けの猛暑日』
作／川端 誠　1,540円（BL出版）

暑いときはオバケだって暑い！ でもちょっとマネできない方法です。子どもたちの暑さ解消法を聞いてみましょう。

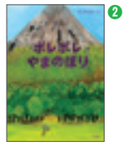
8月 テーマ：名人になろう

❶『せみとり めいじん』
作／かみやしん　監修／奥本大三郎
1,100円（福音館書店）

セミの鳴き声が聞こえてきたら、捕まえに行きたい子が出てくるのでは？ 網など小道具を用意して読むとより効果が増しそう。

❷『ポレポレやまのぼり』
文・絵／たしろちさと
1,540円（大日本図書）

山登り名人になる秘訣は「ポレポレ」です。この本も各ページ、ポレポレと楽しんで。



9月 テーマ：知ってる？ 月のひみつ

❶『月のふしぎ はじめての かがくのえほん』
絵／いしがきわたる　監修／おおぬまたかし
1,650円（マイルスタッフ）

来年（2025年）は月食が2回もあるそうですよ。月の知識が満載で、物知り博士になれます。

❷『つきとうばん』
作／藤田雅矢　絵／梅田俊作
1,430円（教育画劇）

お月さまや星、食べてみたいね。どんな味かな？ 来年のつきとうばんはあなたのおうちかも。

❸『つきを あらいに』
作／高木さんご　絵／黒井 健
1,408円（ひかりのくに）

なるほど、お月さまがきれいな訳がよくわかりました。今夜はどんなお月さま？ 満月かな？ 夜見てみよう、と子どもたちを誘ってみては？

（岩井淳子）

対象別おはなし会のプログラムです。ここで紹介する絵本や紙芝居は、ご家庭での読みきかせにもおすすめです。ブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

祭り

『雨をよぶ龍 4年にいちどの雨ごい行事』
作／秋山とも子　1,650円（童心社）

雨が降らず、生活に欠かせない水が不足したとき、ワラや竹を使って龍神をつくり、「雨が降りますように」と祈った祭りがありました。今も4年に一度行われ、今年がその年です。

夏

『くわばら くわばら』
文／長谷川摂子　絵／飯野和好
836円（岩波書店）

大事に育てたナスが天までのびていったので、息子がのぼっていくと、雲の上には雷さまとその娘がいました。そして、雷雨を降らす手伝いをすることになりました。

紙芝居

『みみをすませて』
脚本・絵／和歌山静子
1,540円（童心社）

お日さまが顔を出して朝が来たら、最初に聞こえてくるのは何の音でしょう。森のほうから、そして、変わる天気から聞こえてくる音もあります。ほら、耳を澄ませてみましょう。

紙芝居

『てんとうむしのテム』
脚本・絵／得田之久　2,090円（童心社）

テントウムシのテムが散歩に出かけます。アオムシやアリ、オケラにトノサマバッタやアメンボに会いましたが、誰も一緒に散歩してくれません。

紙芝居

『子そだてゆうれい』
脚本／桜井信夫　画／須々木 博
2,420円（童心社）

あめ屋のとうべえさんは、旅の若い女の人を山寺の宿に案内してあげました。その夜から毎晩、女の人があめを買いに来ます。不思議に思ったとうべえさんは、あとをつけてみました。

（安冨ゆかり）

※当財団（JPIC）では読書を通して国民の生涯学習推進・読書活動の推進のために、1993年より「JPIC読書アドバイザー養成講座」を開設。読書や出版について体系的に学習する講座です。
JPIC読書アドバイザークラブ（JRAC）とはこの講座の修了生の有志により自主活動しているクラブ。全国に約660名が在籍、地域のおはなし会などで活躍しています。

第16回

保育者のたまごたちと絵本

保育現場の先生たちは、養成校で絵本についてどのように学んできたのでしょうか。
西南女学院大学短期大学部などの事例を末成妙子さんに伺いました。

取材・文／荒木晶子

末成妙子 すえなり・たえこ

梅光学院大学子ども学部特任教授。専門研究分野は音楽教育学、特別支援教育学、幼児の表現。山口県立下関総合支援学校、西南女学院大学短期大学部教授などを経て、今年度より現職。著書に『障がいのある子どもの保育・教育の実践』（学文社、共編著）がある。

絵本を題材として学生が主体的に表現する授業を実施

私が昨年度まで教壇に立っていた西南女学院大学短期大学部は、福岡県北九州市にある2年制大学で、保育科の卒業生のほとんどは保育士や幼稚園教諭となって巣立っていきます。残念ながら来年度より学生の募集を停止することになり、現在は50人ほどの学生が在籍中です。

ここで私は「こども音楽療育」の立場から、音楽を中心とした授業を多く行っていましたが、絵本はすべての授業で大事に取り扱っていました。例えば、昨年度2年生の「子どもと表現」という科目の中では、『ぽんたのじどうはんばいき』を題材とした授業を行いました。この絵本は、タヌキのぽんたが段ボールでつくった自動販売機の後ろに隠れ、訪れるさまざまな動物たちのほしいものを葉っぱと引き換えに出してあげるというおはなしです。学生全員でこの絵本を読み、どんなところで心をゆさぶられたかを考えて、自分たちで段ボールの自動販売機のほか、衣装やぽんたのしっぽなどもつくり、自動販売機の前で「かわいいくしがほしいの」など、それぞれが自分の思いを声や物を使って表現しました。

この授業は後期の半分にあたる8回という短い回数の中で、色塗りワークや折り紙ワーク、劇の効果音に関するワークなどとともに行い、紙芝居をつくることを最終発表課題としていましたが、全体として「とても楽しかった」と学生たちに好評でした。ただ座って講義を聞くのではなく、自分が表現者となって主体的に動くことができたためか、学生たちが積極的に取り組んで意見交換を行っていたのが印象的でした。

絵本を読んでもらうことはごはんを食べることと同じ

同学には図書館とは別に保育科専有の「えほんのへや」があり、たくさんの絵本や紙芝居、保育雑誌が収蔵されていますが、絵本に対する気持ちには学生によって差がありました。

絵本は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という保育の5領域のひとつである「言葉」と、「児童文化」という科目で学びます。私も当初は「絵本100冊」と題して、「1年間で絵本を100冊読みましょう」という課題を出したことがありました。ところが、実際に学生が絵本を手にとることは少なく、インターネットであらすじなどを調べて済ませる者がほとんどでした。そのため、「認定絵本士」の資格を取るという目標を定めることで絵本を学ぶことを働きかけていました。でも、本来は「とてもおもしろいからこの絵本を読みましょう」という熱量が大事だと、私は思っています。

幼少期は、思いやりや気遣いなど学力とは違うものを身につけると同時に、それらの能力が飛躍的に伸びる、本当に大事な時期です。そして、そこに絵本があれば、人生を豊かにする土台になります。できれば家庭で家族に読んでもらい、物語やその時間を共有することが理想ですが、今は保護者が共働きで忙しい家庭が多く、その役割を保育士が担うようになっています。

ですから、保育園での絵本の取り扱い方が、これから先ますます大事になってくるのではないかと思います。これまでも学生たちには、「子どもが絵本を読んでもらうことは、ごはんを食べることと同じように大事で、心の栄養になる」と伝えてきましたが、ずっと伝え続けていきたいと思っています。

頻出する「繰り返しの言葉」を大事に表現してほしい

今年度から赴任した梅光学院大学では、「言葉」や「児童文化」の授業を受け持っていないため、絵本に直接関わる授業はありません。ただ、「表現」の授業は行うので、その中で積極的に絵本を使っていきたいと考えています。

学生たちには、自分自身が好きな絵本を心の中に持って、それをじっくり、じんわりと子どもたちに伝えられる人になってほしいですね。スマートフォンで検索するのではなく、自分の気持ちから動く人になってもらいたいと思います。

それから、絵本によく出てくる「繰り返しの言葉」を大事にしてほしいとも思っています。繰り返しの言葉にちょっとした節をつけて読むことには、その絵本を楽しくする効果があります。子どもに絵本の読みきかせをするにあたって、保育者自身の「ここが楽しいんだ」というのを表現することはとても大事で、その熱量が子どもに伝わってグッと距離が縮まるのです。

今年度の「表現」の授業でも、「はらぺこりんりん、はらぺこりんりん」という印象的な繰り返しの言葉が出てくる『まほうのでんしレンジ』を使うことを考えています。この絵本をもとにして、学生が主体的につくりあげ、子どもたちも参加できる。そんな授業の構想があります。

声を出すこと、お話しすること、手で何かをつくること、そうしたことのすべては保育士に求められる表現です。それを「楽しいね！」と子どもたちと共有することが次のステップになるので、学生たちにはぜひそんな表現を見つけてほしいと思っています。

著作権保護コンテンツ

心の中に好きな絵本を持って子どもたちに伝えられる保育者になってほしい

『まほうのでんしレンジ』
原案／たかおかまりこ
作・絵／さいとうしのぶ
1,408円（ひかりのくに）

『ぽんたのじどうはんばいき』
作／加藤ますみ
絵／水野二郎
1,100円（ひさかたチャイルド）